２０２３年9月１７日（日）／説教者：國分美生

説教：「人生の海の嵐に」
聖書：マルコによる福音書４：３５～４１

イエスのみことばに聞き入っていた多くの群衆をあとに残し、弟子たちはイエスを船に乗せたまま湖に漕ぎだします。私たちの旅はイエス・キリストといつも一緒なんだ、そんなイメージに強く励まされます。やがて船は大波をかぶり、たちまち水で満杯になり、いつ沈んでもおかしくないという恐怖が弟子たちを襲います。この時弟子たちはイエスを起こして訴えます。「私どもがおぼれ死んでもおかまいにならないのですか」と。それは悲痛な叫びであったでしょうし、また、こんな時に寝たままでいるイエスに対し、腹を立ててもいたであろうと思います。見捨てられた、という絶望が押し寄せても全く不思議ではありません。

イエスは弟子たちの訴えを聞いて、起き上がります。そして風を叱りつけ、湖には命令しました。この描写は、イエス・キリストが自然界すべての支配者であることを読む者に知らしめます。旧約聖書には、人間に脅威をもたらす荒海や暴風が神によって鎮められるという場面がいくつも出てきます（77 編 17 節、89 編 10 節等）。マルコ共同体も、そしてこの福音書を読み継いできた者たちも、イエスがまことに神であることを悟ったでしょう。ですが物語はここで終わりません。風と海を叱責したイエスは、一緒に船に乗っていた弟子たちにも、とても厳しい言葉で問いかけます。「なぜそんなにこわがるのか、なぜあなたたちはそんなに臆病なのか」と。大波にもまれて、翻弄されて、もうだめだ、と絶望したのち、ああ助かった、とほっとしているところへイエスのこの厳しい言葉、とても胸に刺さるものであったのではないかと想像します。一見激しく、厳しい対応のように思えますがその姿は、優しいイエス様と乖離しているものではありません。

旧約聖書の神は時として、その力強さゆえに、怖い、ものとして私たちの目にうつります。マタイ福音書のこの物語は、その怖さは愛のゆえであることを伝えています。この人生の荒波の中で、イエス・キリストは「なぜ怖がるのか、信頼しなさい」と私たちに厳しく問いかけ、奮い立たせます。それはキリストの私たちへの愛にほかなりません。（國分美生）